

1. た・づ・な

環境に適応する

日本中央競馬会 生産育成対策部

部長 荒谷 真一



「軽種馬生産構造対策委員会」(1986年2月)の報告書に改めて目を通した。18年前の報告書だ。この「委員会の目的は、軽種馬経営改善資金特別融通助成事業の一環として」「中 長期にわたる軽種馬生産界のあり方とその実現化の方策について検討すること」であった。「軽種馬経営改善資金特別融通助成事業」とは、繁殖牝馬の淘汰(生産調整)を条件に、負債整理資金の借り換え融資を実施し、その借入金に対する利子補給を行うものである。その後、競馬の売上げは上向きに転じ、生産規模も拡大が進んだ。結果、生産調整は思うような成果を上げることができなかった。その好況も長くは続かず、地方競馬は91年、中央競馬は97年をピークに減少を続けている。

報告書の指摘は、今日の状況にもそのまま当てはまる。「今後の方向」については、「国際化は避けられない方向」。「競馬の開催規模が拡大することは望みえない」。「優勝劣敗の原理に基づく経営間競争は、ますます厳しくなる」 「経営の安定化を図るためには、経営基盤が整備され、リスクを分散する方途をもち、加えて経営者能力の向上とそれに基づく自律的需給調整が実践されなければならない」 「従来の慣行に縛られた閉鎖的な考え方」にとらわれない「ビジネスとして合理的に行う必要がある」 「情報の活用」 「関係団体等の協力と柔軟な対応ならびに的確な指導力が不可欠になる」とされている。

日本の競馬はファンに支えられている。競馬主催者は、ファンに魅力ある競馬を提供すること、強い馬どうしによるレベルの高い競走を提供することが重要だ。競馬が健全に栄えることが、生産の振興につながってくる。だから、われわれも、もっとしっかり競馬を運営していかなければならない。競馬をめぐる環境は、急速に変化している。環境を変えることは難しいが、それにしっかりと適応していくことが、生き延びることになる。

いま、生産地は競馬に連動して厳しい環境におかれている。土台には、構造的な問題も存在するが、この環境にどう適応していくのが良いのだろう。報告書が出された18年前のような対策も必要になるのだろうか。景気回復の兆しが見えると言うが、ひと昔前のように、全員が同じテンポで回復し、一緒に成長するということはありません。JRAの支援も期待はされているが、対応には限りがある。「量よりも質」「コスト削減」「多様化 個性化」「やる気」。競馬にも生産にも、他の産業と同様もはや国境はない。少子高齢化の社会も迎える。新たな環境に適応した新たな目線での経営が求められると思う。